

## 「外地」と向き合う試み

藤森節子『少女たちの植民地——関東州の記憶から』

矢部真紀

### 「外地」の思い出

『少女たちの植民地——関東州の記憶から』は、著者である藤森節子氏の回想が主となっている。生まれ育った場所や家族と過ごした時間、学校での出来事、友達との遊び、季節の風物などが当時の社会的な出来事とともに語られる。記憶が曖昧なところは資料や調査によつて補われ、子供の頃に経験した物事が現在の視点によつて再び辿られる。このようなテクストはあるいは自分史と言えるのかかもしれない。しかし本書はそういった位置づけに留まらないようと思えるのは、藤森氏が生まれ育つた場所がかつて日本の大日本帝国が引き継ぎを支配した「外地」であり、一九三〇年代の激動の時代が一人の少女の具体的な

生活とともに語られるからだと思う。さらに、思い出や記憶という個人的なもの語るだけではなく、解説として収録された林淑美「記憶の糸」と「資料さがし」で指摘されている藤森氏の「現在の〈愕然〉」が、読者である私にも搖さぶりかけて胸に穴を開け、忘れない印象を残しているのだと思う。もちろんこのような感想を抱いたのは、私自身の研究上の関心が「外地」に向かっているからだ。当時の資料や文学作品を読むのとは異なる読書体験であったと思う。

さて、本書のタイトル副題にある「関東州」とは、第二次世界大戦の敗戦まで日本が支配した地域の一つである。一九〇五年、日露戦争後のポーツマス条約に基づいて遼東半島の先端部分の租借権をロシア帝国から大日本帝国が引き継

いだ。東清鉄道とその附属地も引き継いで南満州鉄道（満鉄）を設立した。本書には目次の後に一九三二年に発行された『新満州国絵図』（『新満州国写真大観』大日本雄弁会講談社）の一部分が掲載されており、関東州の位置関係が把握できるようになつていて。遼東半島の海に面した方の端には旅順が、そこから大陸へ向かつて大连、金州、普蘭店があり、普蘭店の近くに国境線がある。この国境は関東州と満州との境であつた。藤森氏は一九三二年生まれ、同年に満州国が建国されたのである。藤森氏には若くして戦病死した兄、幼くして亡くなつた姉が二人、七才、三才、一才離れた姉がおり、姉たちによって女学生の生活が家庭に持ち込まれて自分よりも年長の文化をうかがい知ることができた。戦火が激しくなるにつれて物資不足が進むが、姉たちはまだゆとりのあつた時に少女期を過ごすことができたのである。藤森氏自身が女学校に進学したのは一九四五年春（昭和二〇年）、戦争末期でほとんど女学校教育を受けなかつたが、

姉たちと一緒に過ごすことで女学生向けの歌を聞き覚えたりしたという。

【目次を見てみると、「洋錢」、「普蘭店」  
〔娘娘祭〕、「餃子」、「八宝飯」、「酸菜」、「火  
鍋子」などの名詞を拾うことができる。

自由港であった大連は外国製品が入手しやすかつたが、藤森氏が生まれる二年前まで一家は大連に住んでおり、家庭には英國製の毛糸や石鹼<sup>シーフ</sup>があつたという(p. 11-12)。一方で、媳婦と呼ばれる中国人の既婚女性が家事手伝いのために通つており、餃子の作り方を習つて以来ずっと作り続けているという(p. 22)。堅実志向の家庭とはいえ、西洋の製品と中国風の風物に囲まれた生活であろう。関東の地名や草花、食べ物、家の中にあつた物や歌など、暮らしの中で身近にあつた物事を契機として藤森氏は回想を展開していく。本文では、「酸菜」はスアンツアイ、「火鍋子」はフオクオズとルビが振られている。これらのルビは中国語の発音である。関東州で生まれ育つた藤森氏は家庭や学校で日本語を用いていても

小学校では中国語の授業もあり、中国や朝鮮の級友もあり、同じ土地で暮らす人々が話す中国語も見聞きしながら成長した。

「父が金融組合という、中国人との接点にあたる仕事をしていたせいか、そもそも日本人が少なかつたせいか、遊びの場はいつも中国人たちとの境い目あたりだったような気がする」(p. 62)と藤森氏は述べているが、このような環境で子供が耳から覚えた言葉ならば、意味を理解する前に言い覚えることは不思議ではない。藤森氏は子供時代に耳から覚えた言葉の一つである「サンピーケー」(p. 76)を回想して立ち止まり、その中国語の發音が意味する言葉を友人に尋ねて「鎗斃給」であることを知り、日本語の意味は「銃殺」であると認識する。かつて日本人の子供たちが囁いて言つていた言葉は、周囲で暮らす中国人を脅かす意味だったことに気がついたのだ。生まれ育つた「外地」の思い出をなぞり、現在の視点で辿り直すことによって、植民地で宗主国の人々が話す中国語も見聞きしながら成長した。

さらに藤森氏の思いを複雑にするのは、第二次世界大戦の終結直後に普蘭店で起きた出来事である。藤森氏は一九四三年に普蘭店から金州に引っ越しるために難を逃れたが、一九四五年に普蘭店では日本人に対する中国人の暴動が起きた。もしかしたら自分も暴動に巻き込まれた一人であつたかもしれないという思いから、藤森氏は中国人にも級友たちにも「詫びたい」(p. 82)という気持ちを刻みこんでいる。個人の思い出が否応なく国家的な歴史と絡み合つており、生まれ育つた地に対する懐かしさとともにどうしようもなく胸が張り裂けるような気持ちは抱え込まざるを得ないような複雑さ、このような事態はとても共有できるものではないだろう。けれどもこのような複雑さに向かう姿勢を、本書を読むことで読者である私も知ることができるのではないか

じ思う。

## 「外地」へのまなざし

本書では関東州や満州に関する文学テクストがいくつか引用されている。大連に住んでいた安西冬衛の詩もその一つだ。安西の詩集『軍艦茉莉』に登場する大連や普蘭店と比べて、満鉄の地方部土木課に勤めていた古川賢一郎が描き出した満州の厳しさに言及して藤森氏は、「植民地のモダンな生活にはかけらほどの縁もないこの生活」(p.154)と述べている。

藤森氏は彼の足跡を追うが、「満州」を

もちろんまずは私自身の不明を恥じるべきだが、詩人や作品だけの問題ではなく、満州という場所で仕事をして毎日の暮らしを立て、もがきながら紡がれたテクストの存在を忘れてしまうことへの自省を得られたのは私自身にとつて有意義である。

藤森氏は満州鉄嶺で生まれて普蘭店で育ち、父親の転勤で金州へ移動もしたが家族とともに一五年ほどを過ごして、第二次世界大戦で日本が敗戦したことによって大連港から関東州を出た。引き揚げは一九四七年三月末である。敗戦によって日本が有した租借権は失われ、藤森氏が生まれ育った地は異国となつたのだ。

日本近代文学において「外地」で暮らした経験を織り込んだテクストは少なくないが、例えれば真杉静枝、高田敏子、林京子らのものを挙げることができよう。そして有名なのは安西冬衛であり、大連

で発行された詩雑誌『亞』であろう。外地で暮らした古川賢一郎のような書き手は、本書を読むことで私は初めて知った。

特に林京子は一九三〇年生まれ、翌年に家族とともに上海に移り、一九四五年三月に上海から長崎へ引き揚げた。藤森氏と同年代であり、少女時代を家族とともに外地で過ごして引き揚げを経験している。当時の上海には租界が置かれており、日本も共同租界に海軍陸戦隊を配置していた。上海の東北部あたりに位置する虹口は日本人が多く住んだ地域だが、

林京子の一家はそこから少し離れた場所に住んだために周囲に中国人が多く住んでいた。藤森氏は関東州、林京子は上海と、過ごした場所は異なるし、そもそも両地は非常に離れているのだが、同時期に少女時代を外地で過ごした書き手として私には興味深い。藤森氏は女学生の時を回想して、「いつの間にか、転入生紹介もなく、上海はあぶない」というので金州へやつてきた上海内外縦の子が混じっている」(p.284)と述べている。個々の家庭での移動ゆえに公的な史料にはなかなか載らないようなことかもしれないが、それゆえに本書におけるこういった記述

は貴重なものとして忘がたい。

そして台湾も「外地」の一つであった。

日本が租借権を持った関東州とは異なり、

台湾では植民地統治が行われた。日本に

よる統治は一八九五年から一九四五年まで、第二次世界大戦の終戦後に台湾は



写真1：旧台湾総督府庁舎（現 中華民国総統府）

中華民国の統治下に入った。二〇一三年

には台湾映画「セデック・バレ」が公開

されたが、ご覧になつた方も多いのでは

ないだろうか。この映画は日本統治期の

一九三〇年に起きた台湾原住民による抗

日暴動事件、霧社事件を描いた物語だ。

この暴動を鎮圧するために軍隊が出動し

た。日本統治期では武力も用いられたが、

同化政策として日本語教育なども併せて

行われた。そのために現在でも日本語を

理解するご高齢の方は多い。例えば旅行

で台北を訪れたとしよう。旧台湾総督府

は観光名所の一つであり、平日の午前中

など指定日には内部を見学することがで

きる。（写真1）館内に展示されたパネル

などを巡りながら台湾について学ぶこと

ができるが、見学者が日本人であれば日

本語を話すガイドがついてくれる。数年

前だが私が行った時のガイド担当はご高

齢の男性の方で、第二次世界大戦中の大

日本帝国陸軍師団に詳しく、ご家族の歴

史として日本統治期を経験されていた。

また、台湾を代表する作家である鐘肇

政さんは一九二五年生まれで日本語教育

を受けており、日本語は流暢である。創

作は中国語でされているが、中国語は日本

統治期が終わってから独学で習得した

という。私は近年、東アジアにおける日

本語文学に関心を持ち、日本と台湾との

文化的な交流に関する調査などを行って

いるが、二〇一二年に鐘肇政さんにお会

いする機会を得た。台湾における日本語

文学の第一人者である張良澤先生が鐘肇

政さんにインタビューするところにご一

緒させていただいたのである。

鐘肇政さんは客家の人々が多く住むと

いう台湾北部の龍潭で暮らしている。近

くには桃園客家文化館があり、ちょうど

鐘肇政さんの展示が開催中であったた

めに、ご本人に案内していただきこと

ができた。（写真2）展示会場では映像も

放映されており、日本の敗戦によつて台

湾が日本の統治下から「解放」されたと

ころも見ることができた。当時のインタ

ビュー映像で若き鐘肇政さんが「使命感

にかきたてられて書いていた」と話され

ていたことは今も忘れることができない。この映像はインタビューを一緒にした



写真2：張良澤先生（左）と鐘肇政さん（右）

方々とともに見ており、もちろん私一人の心中に限ったことであるものの、その場で覚えた感じはうまく表現することができない。激変していく動きを記録する映像を見ながらはつとするような強い印象だったが、やはりどのようなものだったのか今でも言葉が見当たらない。私がこのような経験を振り返るたびに、「外地」への関心が高まれば高まるほど問題の複雑さが増していくようと思える

し、まだ見えていない問題も多いのだろうと思う。

旧植民地であった地域における日本語文学文化に关心を持つて資料や文学作品などを読み、映像や音楽なども見聞きしていく。けれども、それを経験した当事者や、自分たちの歴史として学んできた若い世代の人々とは全く異なるのだ。むろん彼らと同じ立場を目指すことはできないが、彼らとどのような対話を持つことができるだろうかと考へることは方法の一つかもしれないと思う。そのためには自分の立場を考えながら「外地」という問題と向き合うことが必要だろうが、模索を始めたばかりの今の私にとって容易なことではない。歴史的な出来事と個人の思い出が絡み合った複雑さを、簡単に解釈せずにどのように向き合つていいのかを、本書を読んで藤森氏の姿勢から少しでも学びたいと思う。